

ソフイーの世界

哲学者からの不思議な手紙

ヨースタイン・ゴルデル 著 須田 朗 監修 池田香代子 訳

ソフィーの世界

哲学者からの不思議な手紙

ヨースタイン・ゴルデル＝著 須田 朗＝監修/池田香代子＝訳

NHK出版

ソフィーの世界

～哲学者からの不思議な手紙

1995年 6 月30日 第 1 刷発行

1995年 8 月10日 第13刷発行

著 者——ヨースタイン・ゴルデル

監修者——須田 朗

訳 者——池田 香代子

発 行——日本放送出版協会

〒150-81 東京都渋谷区宇田川町41-1

電話 (03) 3464-7311 (代表)

振替 00110-1-49701

印 刷——享有堂/大熊整美堂

製 本——石毛製本

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

Japanese Edition Copyright ©1995 Akira Suda/Kayoko Ikeda

Printed in Japan

ISBN 4-14-080223-5 C0097

Ⓔく日本複写権センター委託出版物 本書の無断複写（コピー）は、著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。

S o f i e s V e r d e n

R o m a n o m f i l o s o f i e n s h i s t o r i e

この本は、シーリ・ダンネウィクの励ましのおかげで書き上げる
とできた。草稿を読んで貴重な助言をしてくれたマイケン・イム
スにも感謝したい。そしてなによりも、長年にわたってひょうきん
な批評や手堅い専門的なコメントでわたしを支えてくれたトロン・
バルグ・エーリクセンに、ありがとう。

——ヨースタイン・ゴルデル

目次

エデンの園——とにかく、いつか何かが無から生まれたはず	9
シルクハット——いい哲学者になるためにたつた一つ必要なのは、驚くという才能だ	20
神話——いい力と悪い力があやういバランスを	35
自然哲学者たち——無からはなにも生まれない	44
デモクリトス——世界一、超天才的なおもちや	61
運命——占い師は、本来意味のないものから何かを読みとろうとする	68
ソクラテス——もともとかしこい人は、自分が知らないということを知っている人だ	80
アテナイ——そして廃墟からいくつもの建物がそびえ立ち	100
プラトン——魂の本当の住まいへのあこがれ	107
少佐の小屋——鏡の少女が両目をつぶった	127
アリストテレス——人間の頭のなかをきちんと整理しようとした、おそろしくきちょうめんな分類男	139

ヘレニズム——炎から飛び散る火花

絵はがき——自分にきびしく口止めをして

二つの文化圏——それがわかつてこそ、きみは空っぽの空間の根無し草ではなくなるのだから

中世——とちゅうまでしか進まないことは、迷子になることとはちがう

ルネサンス——おお、人間の姿をした神の族よ

バロック——数かずの夢を生む素材

デカルト——工事現場から古い資材をすつかりどけようとした人

スピノザ——神は人形使いではない

ロック——先生が来る前の黒板のようにまっさら

ヒューム——さあ、その本を火に投げこめ

バークリ——燃える太陽をめぐる惑星

ビヤルクリ——曾祖母さんがジブシーの女の人から買った古い魔法の鏡

啓蒙主義——縫い針の作り方から大砲の鑄造まで

カント——わたしの頭上の星空とわたしのうちにある道徳律

ロマン主義——神秘の道が内面にうつじ

ヘーゲル——理性的なものだけが生きのびる

キルケゴール——ヨーロッパは破産への道をたどっている

マルクス——妖怪がヨーロッパじゅうを歩きまわっている

ダーウイン——遺伝子を乗せて生命の海を行く舟

フロイト——彼女の心に兆したおぞましい、身勝手な願望

わたしたちの時代——自由の刑に処されて

ガーデンパーティ——白いカラス

対位法——二つがそれ以上のメロディが同時にひびく

ビッグバン——わたしたちも星屑なんだ

解説◎須田 朗

訳者あとがき◎池田 香代子

人名さくいん

三千年を解くすべをもたない者は
闇のなか、未熟なままに
その日その日を生きる

——
ゲーテ

エデンの園——とにかく、いつか何かが無から生まれたはず

ソフィー・アムンセンは学校から帰るところだった。とちゅうまではヨールンといっしよだ。二人は道みちロボットの話をしていた。ヨールンは、人間の脳は複雑なコンピュータみたいなものだ、と言った。ソフィーはよくわからなかった。人間は機械なんかより上なんじゃないかなあ。

スーパリーのところで、二人は別れた。ソフィーの家は一戸建ての並んだ町はずれにあって、学校からはヨールンの家までのほとんど二倍も遠かった。ソフィーの家は、まるで世界の果てにあるみたいだった。庭のむこうにはもう家はなく、森が始まっていた。

ソフィーはクローバー通りを曲がった。通りのどんづまりは急なカーブになっていて、「船長カーブ」と呼ばれている。人はめったにとおらない。とおるとしても土曜日か日曜日だけだった。

五月になってまだ日も浅く、あちこちの庭ではラッパ水仙が果樹の根元にびっしりとよりそうように咲いていた。白樺はうつすらと芽吹いて、まるですきとおる緑のヴェールをかぶったようだった。

この季節、なにもかもが芽吹き、いっせいに伸びはじめる。どうして暖かくなつて根雪が消える、と、死に絶えたような大地から緑の葉っぱや草が湧き出すのだろう？ 考えると不思議な気がする。

門をあける前に、ソフィーは郵便箱をのぞいた。ふだんならダイレクトメールがどっさり、それから母宛ての大きな封筒が何通か入っている。ソフィーはいつも、郵便物の束をキッチンテーブルに置いてから、宿題をしに自分の部屋に行くことにしていた。

父には、たまに銀行の口座残高通知がくるだけだった。ソフィーの父親はふつうの父親とは少しちがっていた。大きな石油タンカーの船長で、ほとんど一年じゅう家を留守にしている。何週間か帰ってきた時は、外出することもなく、ソフィーや母と水入らずの時を過ごす。けれども航海に出ているあいだは、ちよっぱり影が薄かった。

きょう、緑色の大きな郵便箱には小さな手紙が一通だけ。それはソフィーにきていた。

小さな封筒に、「ソフィー・アムンセン様」と書いてある。「クローバー通り三番地」、それだけ。差出人の名前はない。切手も貼っていない。

門をしめるとすぐ、ソフィーは封をあけた。なかには封筒よりひとまわり小さな紙切れが一枚入っているだけだった。紙切れにはこう書いてあった。

あなたはだれ？

たったのこれだけ。ごあいさつも、差出人の名前もなく、手書きでこの六つの文字と、大きなクエスチョンマークが書いてあるだけだった。

ソフィーはもう一度、封筒を見た。たしかにソフィー宛てだ。こんなもの、いったいだれが郵便箱に入れたのだろうか？

ソフィーはいそいで赤い家のドアをあけた。ドアをしめる前、いつものように猫のシェレカンが茂みから現れて、階段にぴよんと飛び乗り、するりとなかに入ってきた。

「ただいま、シェレカン！ おりこうさんにしてた？」

ソフィーの母親はちよつと機嫌が悪いと、この家はまるで動物園ね、と口癖のように言う。動物園

にはいろいろな動物がいるけれど、生き物が大好きなソフィーもいろいろ飼っていた。まず、水槽には金の巻き毛ちゃんと、赤ずきんと、まっ黒ペーターという名前の金魚がいた。それからセキセイインコのトムとジェリー、亀のゴーヴィンダ、そして黄色と茶色のトラ猫シエレカン。ソフィーのさびしさを紛らわすのが、動物たちのお役目だった。なぜなら、母は夕方にならないと仕事から帰ってこないし、父はいつも世界のどこかを航行中だったから。

ソフィーは通学バッグを投げ出すと、シエレカンの前にキャットフードの皿を置いた。それから謎の手紙を手に、キッチンいっしんの椅子いすに腰かけた。

あなたはだれ？

それがわかったら苦労はないわ！ もちろん、わたしはソフィー・アムンセン。でも、それはどんな人？ まだよくわからない。

もしもほかの名前だったら？ たとえばアンネ・クヌートセンとか。そうしたら、わたしは別の人になっていた？

ふいにソフィーは、「初めはシュニニューフェという名前にしようかと思ったんだよ」という父のこぼれを思い出した。ソフィーはだれかと握手をするふりをして、「シュニニューフェ・アムンセンです」と自己紹介する自分を想像してみた——だめ、そんなのだめ。だとしたら、これまでの時間はそっくり別のもの思えてくる。

ソフィーははじけたように椅子から立ちあがると、謎の手紙をもったまま、バスルームに行った。そして鏡の前に立って、じっと目を見つめた。

「わたしはソフィー・アムンセンです」ソフィーは声に出して言った。

鏡のなかの女の子は返事をしない。表情一つ動かさない。ソフィーがなにかすると、まるで同じことをする。ソフィーはすばやく動いて、鏡の女の子を出し抜こうとした。けれども、相手も同じだけ

すばやく動いた。

「あなたはだれ？」ソフィーはたずねた。

やっぱり返事はない。けれどもソフィーは、今たずねたのは自分なのか、それとも鏡の女の子なのか、一瞬わからなくなってしまうた。

ソフィーは鏡の顔のまんなかを指さして、言った。

「あなたはわたし」

返事がないので、今言ったことをひっくり返して言ってみた。

「わたしはあなた」

ソフィー・アムンセンは、自分の顔がそんなに気に入ってはいなかった。よく、アーモンドみたいに切れ長のきれいな目をしている、と言われるけれど、ほめてもらえるのはそこだけ。なぜなら、鼻は低いし、口はちよつと大きめだったから。それに、目と目のあいだが離れすぎている。最悪なのは、髪の毛にウェーブがかかっていることだ。ちつとも思うようにまとまらない。父はよくソフィーの硬い髪を撫でながら、「すなおない髪だね」と言った。パパったら、もう！ 自分がわたしみたいなのは、それと黒髪をもつ運命ではなかったものだから、平気でそんなことを言うのよ。ソフィーの髪は、スプレーをかけてもジェルをつけても、どうにもかっこうがつかなかった。

ソフィーは、自分の顔つきがおかしいと思っていた。それで、生まれた時につごうの悪いことでもあったのでは、と考えることすらあった。母も「あなたは難産だね」と言っていた。でも、生まれ方が人の顔つきを決めるなんてことがあるのかしら？

自分がだれなのか知らないなんて、ちよつとへんじやない？ それに、自分の顔なのに自分で決められないなんて、そんなのあり？ 顔は生まれつき決まっている。友だちなら選べるのに、自分のことは自分で選んだわけじゃない。人間になることだって、わたしが選んだんじゃない。

人間って何？

ソフィーはもう一度、鏡の女の子を見た。

「ふうつ、そろそろ生物の宿題をしようかな」

ソフィーは、なんだか自分に言い訳するように、声に出して言った。そしてバスルームから出て玄関に立った時、ふいに気が変わって、宿題はあとにして庭に行くことにした。

「シェレカン、お外に行くよ、シェレカン！」

ソフィーは猫を表に呼び出して、ドアをしめた。

謎の手紙をもって外の砂利道に立っているうちに、ソフィーは突然、奇妙な感覚に襲われた。まるで自分が、魔法の力で生かされている人形のような気がしたのだ。

わたしはこの世界にいて、不思議な物語のなかを動きまわっている。それって、なんだかへんね。

シェレカンは優雅に砂利道を飛び越えて、そばの赤スグリの茂みに姿を消した。元気な猫だ。白い髭の先からよく動くしっぽの先まで、元気いっぱい。シェレカンは、ソフィーが感じているこんなことなど、これっぽっちも感じていないのだ。

ソフィーはひとしきり、わたしはいる、と考えた。すると、いつまでもいるわけじゃない、と考えるわけにはいかなかった。

今わたしはこの世界にいます。でもいつかある日、わたしは消えてしまう。

死後の生はあるのだろうか？ この問いも、猫にはさっぱりわからない。

ついこのあいだ、祖母が亡くなった。それから半年以上、ソフィーは毎日のように、祖母のいないさびしさを噛みしめたものだった。命に終わりがあるなんて、そんなのあんまりだわ！

ソフィーは砂利道に立ったまま考えこんだ。わたしはいつまでも生きているわけではない、という

ことを忘れようとして、いっしんに、わたしは生きている、とだけ考えようとした。けれどもまるでだめだった。わたしは生きている、と考えれば考えるほど、この命はいつか終わる、という考えもすぐに浮かんでくる。その反対でも同じだった。わたしはある日すっかり消えてしまう、と強く実感して初めて、命はかぎりなく尊い、という思いもこみあげてくる。まるで一枚のコインの裏と表だ。ソフィーはそのコインを頭のなかでいつまでもひっくり返していた。コインの片面がくつきりと見えれば見えるほど、もう片面もくつきりと見えてくる。生と死は一つのことがらの両面なのだった。

人は、いつかはかならず死ぬということを思い知らなければ、生きているということを実感することできない、とソフィーは考えた。そして、生のすばらしさを知らなければ、死ななければならぬということを感じ取りと考えることもできない、と。

ソフィーは、祖母が自分の病気を告げられた日に、似たようなことを言っていたのを思い出した。「人生はなんて豊かなんでしょう、今ようやくわかった」

たいていの人が、生きることのすばらしさに気づくのが病気になってからだなんて、悲しい。みんなが謎の手紙を郵便箱に見つけられればいいのに。

また手紙がきていないか、見たほうがいいかな？ ソフィーは門に駆けよって、緑色の蓋をもちあげた。そして、まったく同じ封筒を見つけて飛び上がった。一通めを取った時、郵便箱は本当にもう空っぽかどうか、ちゃんと確かめたはずなのに。

この封筒も表書きはソフィーの名前になっていた。ソフィーは封を破って、一通めとそっくりな白い紙を引っ張り出した。

世界はどこからきた？